

## 第3章 特別史跡安土城跡の本質的価値

### 1. 史跡等の本質的価値

安土城は城郭史上初めて高層の天主、高石垣、瓦葺き建物がセットで登場した城である。これら3要素はのちの近世城郭に継承され、現在われわれが持っている城郭のイメージの原形となった。このように安土城は近世城郭の出発点として、城郭の歴史の画期となった城である点に第1の価値がある。

また、城内が金碧の障壁画で飾られ、金具や漆などの装飾が随所に見られるなど、当時の伝統文化・技術を集大成した城であった点も重要である。

そして豪壮華麗な高層の天主を持つ初めての城郭として、城郭建築の面から見ても画期的であったことが指摘できる。またこうした安土城の姿は当時来日していた宣教師の本国への書簡を通して遠くヨーロッパにも伝えられ、広く海外にまで知られていた。

こうした城郭の物質的側面だけでなく、日本の歴史上における城郭の役割・機能といった点でも安土城には画期性が認められる。

信長は、清須城から小牧山城、岐阜城と居城を移し、次に安土城にたどり着いた。しかし、安土城と他の3城とが決定的に異なるのは、清須城・小牧山城・岐阜城が戦国大名織田信長が領国支配の拠点とした城であったのに対し、安土城が戦国大名としての地位を越える天下人として築いた城であったという点である。安土築城の前年、信長は家督を嫡男の信忠に譲っているが、これは戦国大名としての地位を信忠に譲り、自身はより上位の天下人となることを示すものである。こうした段階で築かれた安土城は、単なる織田領国の拠点ではなく、天下人として全国統一を進めていくうえでの拠点として築かれたものである。戦国末期に、後の統一政権へとつながる天下人の居城として初めて登場した城である点にきわめて大きな価値がある。

### 2. 構成要素の特定

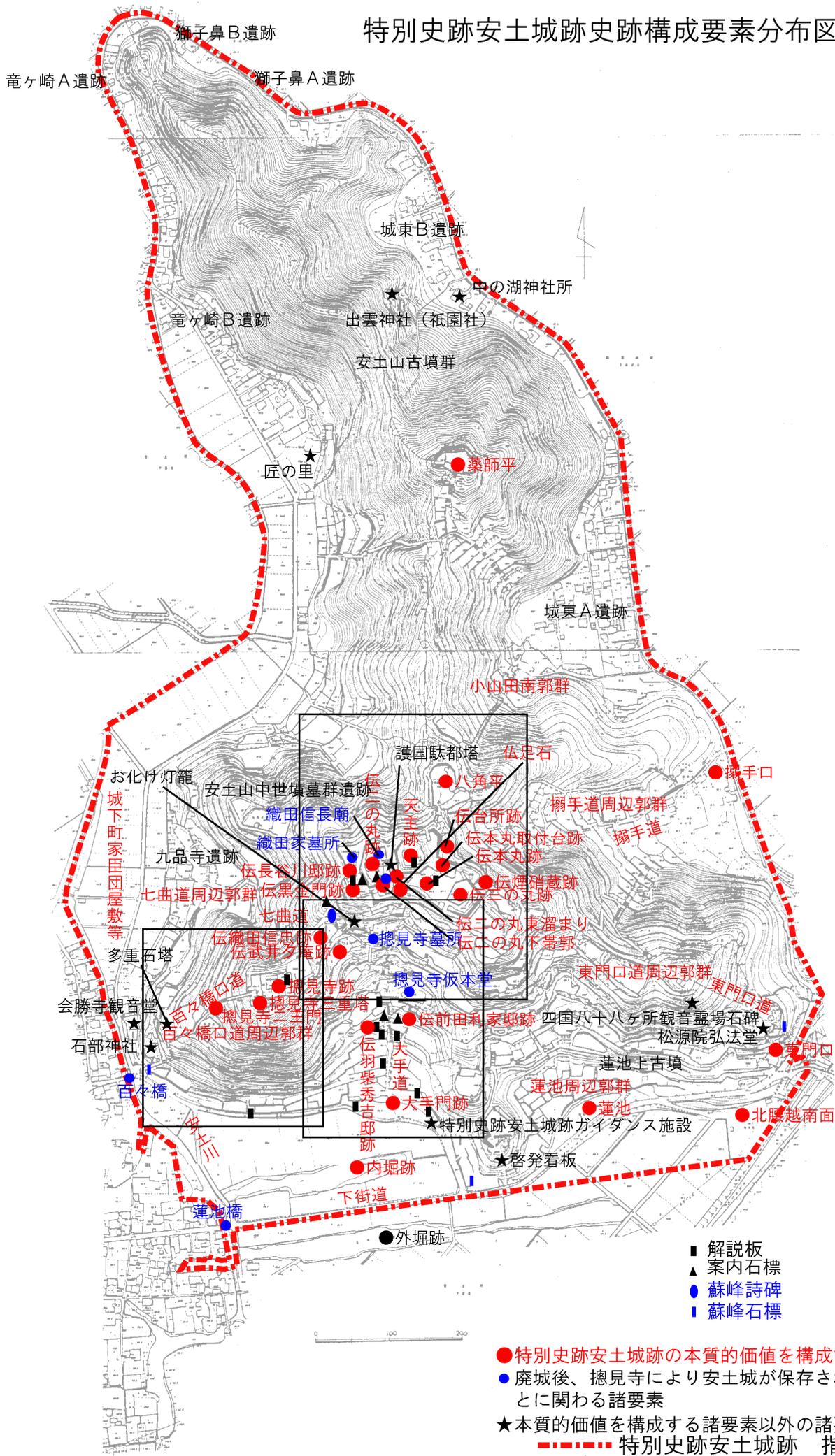
#### (1) 構成要素の分類

安土城跡は様々な要素から構成されているが、その要素は本質的価値を構成する諸要素とその他の諸要素に区分される。

本質的価値を構成する諸要素とは、天正4年の築城から始まり、天正10年本能寺で織田信長が明智光秀に討たれた後、羽柴秀吉が織田信忠の遺児三法師を立てて後見人として安土城に一時期入城し、さらに三法師に代わって織田信雄が城主として入り、秀吉政権になり八幡山に城が移され廃城となる天正13年までの安土城に関する遺構等の諸要素である。これらを本質的価値を構成する諸要素の中でも「安土城そのものを構成する諸要素」とする。

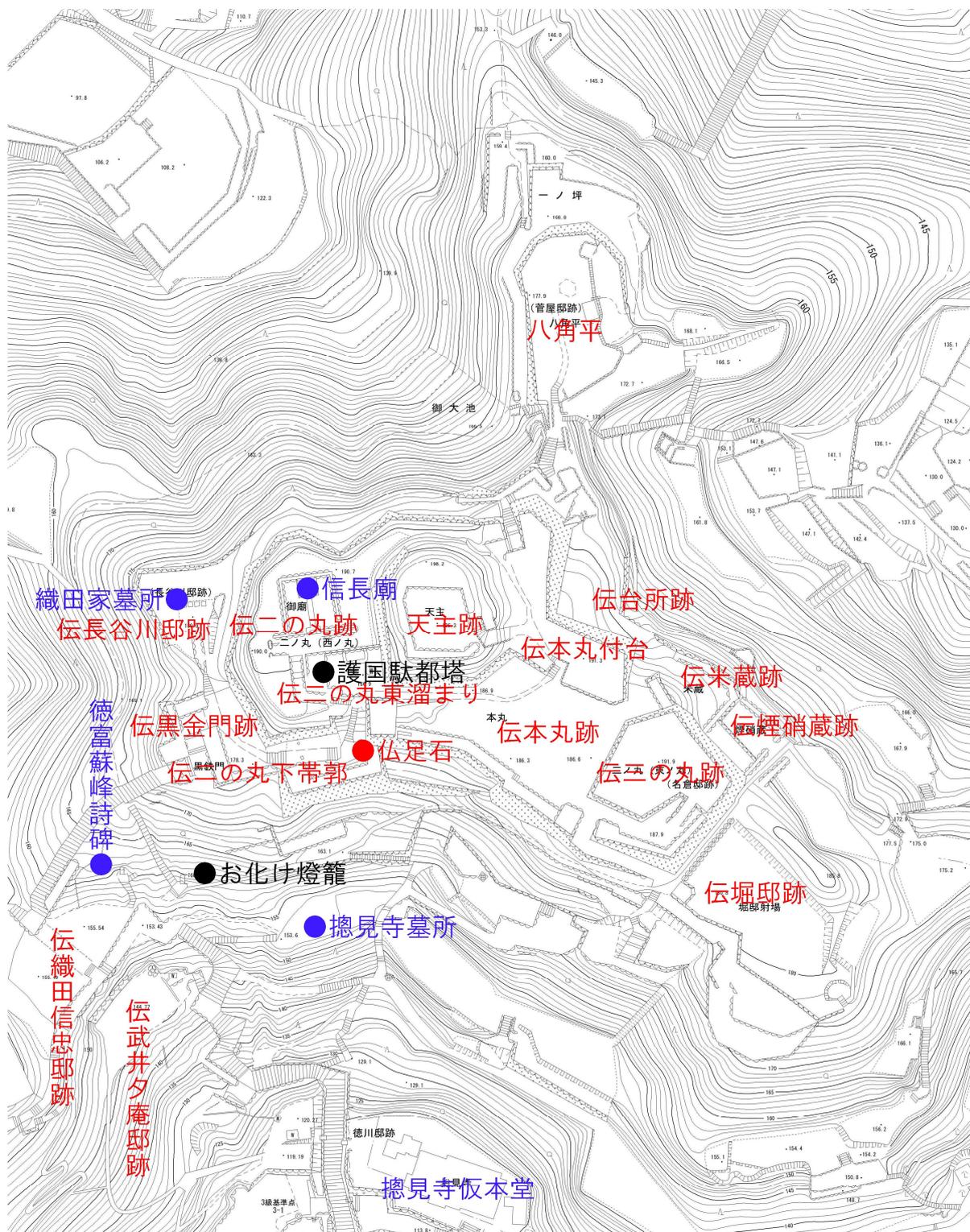
また、江戸時代以降、織田信長の菩提を弔う伝二の丸跡の御廟を始め、年忌法要に関わって造られた施設、安土山を維持管理してきた惣見寺、大正から昭和にかけての徳富蘇峰に関連する遺構等安土城跡の保存に関わる要素があり、これら廃城後の諸要素も「廃城後、惣見寺により安土城跡が保存されてきたことに関わる諸要素」として、本質的価値を構成する諸要素に位置づけられる。

# 特別史跡安土城跡史跡構成要素分布図

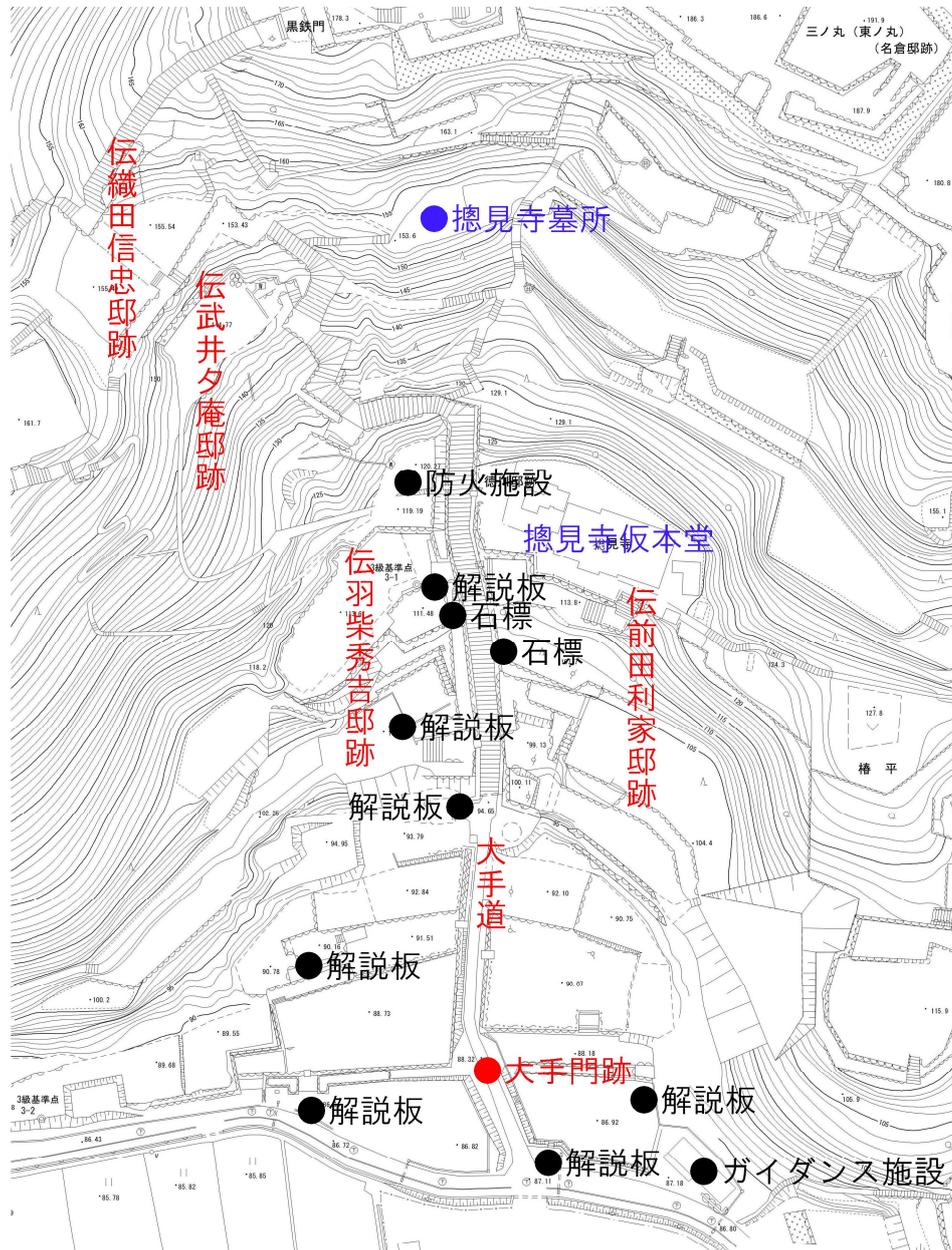


- 解説板
- ▲ 案内石標
- 蘇峰詩碑
- ┆ 蘇峰石標

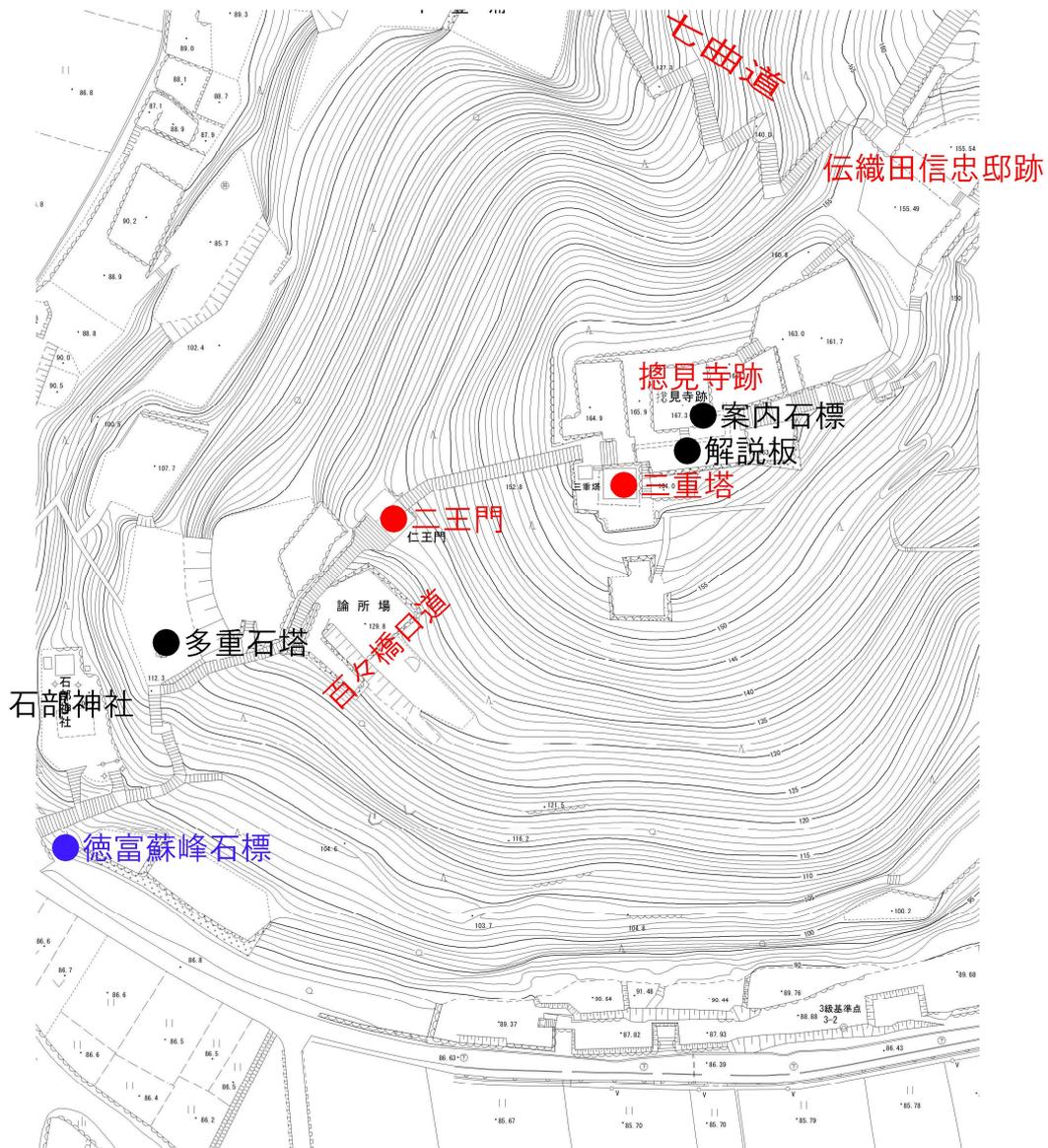




特別史跡安土城跡史跡構成要素分布図（主郭周辺部）



特別史跡安土城跡史跡構成要素分布図（大手道周辺部）



特別史跡安土城跡史跡構成要素分布図（百々橋口道周辺部）

その他の諸要素は、安土城築城以前に安土山に造られた古墳・寺院といった遺構、その後の安土山の歴史に関わる遺構、江戸時代以降に設けられた宗教施設等、さらには、小中の湖が干拓地化され入植者が居住してから以降に造られた諸要素で、居住者の生活に関連する住居・車庫・道路・電柱・上下水道、農地・農舎といったもの、現代における保存管理または公開活用を目的とした文化財保存活用施設等でガイダンス施設・安土匠の里施設・遺構説明板石標・防火施設がある。

さらに指定地の周辺には特別史跡安土城跡一帯の歴史的景観を構成する諸要素が含まれる。これらには、内湖を含めた安土城の景観を構成する諸要素と、安土城下町の景観を構成する諸要素とに大別することができる。

史跡の構成要素	本質的価値を構成する諸要素 安土城そのものを構成する諸要素 廃城後、摠見寺により安土城跡が保存されてきたことに関わる諸要素
	その他の諸要素
指定地の周辺地域の歴史的景観を構成する諸要素	

## (2) 本質的価値を構成する諸要素の概要

### ①安土城そのものを構成する諸要素

#### ア) 造成地形・縄張

大中の湖・小中の湖に半島状に突き出た安土山を利用して築城されており、天主を始めとする主郭部から放射状に延びる各尾根筋と山内道の両脇に郭が造られている。

また、安土山は琵琶湖の対岸にあたる湖西からは、長命寺山が邪魔をして見えず、東山道からも観音寺城のきぬがさ山が立ちほだかって見えない。いわゆる隠れた場所に立地している。

郭には、現在「伝〇〇」と家臣の名前がついているものがあるが、これらは貞享4年(1687)作成の「近江国蒲生郡安土古城図」（摠見寺蔵 以下「安土古城図」とする）の記述によるものであり、必ずしも郭名の家臣が住んでいた確証はない。中には「伝前田利家邸」のように、何の根拠もなく創作されたものもある。また、尾根上にある郭には「〇〇平」という名がつく。山塊を切岸により成形し、尾根上や山腹に雛壇状の郭や堀などの施設を配し、谷筋や尾根に道が造られた山城を基礎に、総石垣による普請を信長がおし進めたことで有名であり、築城史上特筆すべきものがある。特に大手周辺の形態は金剛輪寺等、近江に特有の中世山岳寺院の坊跡が並ぶ形態を城郭に採用したという説もある。

## イ) 城郭を構成する歴史的建造物等

摠見寺は、天正年間安土城の築城とともに建立された寺であるが、正確な建立年代は不明である。信長時代の摠見寺は、資料が残っておらず、『信長公記』に記述されている建物も「毘沙門堂」「御舞台」の2つのみである。廃城後も存続し、豊臣秀頼が庫裏等の建立に寄進したのを始め、江戸幕府からも寺領を与えられていた。文化12年(1815)に刊行された『近江名所図会』「安土山摠見寺」に仏殿・円通閣・鎮守社・拝殿・鐘楼・楼門(二王門)その他が書かれているが、江戸時代末の安政元年(1854)の火災で三重塔・二王門・鐘楼・裏門を除く主要建物の大半が失われた。鐘楼は明治まで残っていたが朽ち果て、裏門は東近江市南須田の超光寺表門として移築されており、現在当初の位置にあるのは三重塔と二王門のみである。

### 【摠見寺三重塔(重要文化財) 一基】

三重塔は、表門の脇、仏殿よりは一段下がったところにある。心柱に「享徳三甲戌年」(1454)の墨書と三重内部四天柱に「起立戊辰歳ヨリ始供養甲戌歳ニテ七年此間能奉行伊庭良隆」の墨書があり、守護代伊庭満隆の近縁者とみられる伊庭良隆を奉行に、文安5年(1448)に起工し、享徳3年(1454)に落成したと思われる。摠見寺創建よりも120年以上も前に建てられた塔である。寺の由緒書には甲賀郡から移築されたことが記されており、寺院名は明記されていないが、二重内部四天柱に記された「天文廿四乙卯二月廿八日ヨリ西エンソコ子(縁損ね)申候間造立令處也 大工平松弥二郎左衛門村田千彌于藤太夫両三人ニテ 三月十七日迄造立也 于時年行事玄能坊定現坊筆焉 ハシラ十二本七十二人持瓦師三郎左衛門」の修理墨書銘より、大工の平松



二郎左衛門がその姓から旧甲賀郡甲西町平松の住人、村田千彌が平松とは野洲川を挟んで対岸にある岩根に村田姓が多くみられることから岩根の住人で、移築前にあった場所は甲賀郡西部にあった可能性が高いこと、甲賀郡にはかつて塔を有していた寺院が三カ寺知られるが、そのうち平面規模や柱の芯々間隔が一致すること、四天柱は西側の来迎壁が取りつく二柱のみであることなどの一致点から現在の甲賀市石部町東寺の長寿寺の三重塔を移築したとされている。石部町西寺には同じく国宝に指定されている常楽寺三重塔があるが、摠見寺三重塔は少し規模が小さいものの類似した技法がみられる。

### 【摠見寺二王門(重要文化財) 一棟】

二体の金剛力士像がまつられており、この門の呼び名の由来となっている。三重塔より下の百々橋口道中段にある。建物の形式は三間一戸の楼門である。棟木に「元龜二年辛未七月二十一日奉建立 氏子同名繁盛願主山中大和守俊好建立」と墨書されており、元龜2年(1571)の建立であることがわかる。山中俊好は甲賀五十三家の「柏木三



家」の一つにあたり、柏木御厨五郷を了していたことから伝承では甲賀郡水口（甲賀市水口町）の柏木神社の楼門であったといわれている。同社の楼門であったことは、墨書銘の「氏子同名 繁盛」のように神社関係でしか使わない「氏子」や「繁盛」という寺院になじまない言葉からうかがえる。

【惣見寺二王門金剛力士像（重要文化財）】

頭部内面に[阿方]「仏師 いなは（花押） さく」[吽方]「応仁元年ひのとの井六月 たか御い志大富 因幡院朝（花押） 作」と墨書があり、応仁元年（1467）6月に因幡院朝によって造立されたことがわかっている。ヒノキ材寄木造、目に玉眼が入れられており彩色が施されている。院朝は他に作例が無く作者の詳細は不明である。京都の院派仏師の流れにつながる者ではないかと思われる。像高は阿形が212.8 cm、吽形が211.5 cmである。吽形の玉眼は昭和の大戦後、盗難にあい欠損している。



なお楼門が柏木神社のものとする、この二王像もどこかの寺院から持ってきたものではないかと考えられる。

ウ) 城郭遺構

【山内道（石段等）】

『信長公記』等の記録に出てくる道は、「百々の橋より惣見寺へ御上りなされ」とある「百々橋口道」のみである。城の内外を結ぶ主要な山内道はこのほかに南中央の「大手道」、東側の「搦手道（台所道）」、城下町家臣団屋敷から上がる「七曲道」、北腰越えの弘法堂と伝徳川邸を結ぶ「東門口道」などがある。「百々橋口道」を含め、それぞれの道の名は後世に命名されたものである。大手道・百々橋口道・搦手道で発掘調査が実施された。

大手道は環境整備工事により築城時の姿に復元整備が行われている。百々橋口道は調査によ



上段左から 大手道 搦手道  
百々橋口道  
下段左から 東門口道 七曲道